

新釈『夜鶴庭訓抄』(一)

一、新釈『夜鶴庭訓抄』の意図と意義

本稿は、日本の草創期の書論、世尊寺家六代目・藤原伊行(一一三九?—一一七五)著『夜鶴庭訓抄』(一一六五年頃成立)について、中世の初期写本に基づき、新たな解釈を試みたものである。『夜鶴庭訓抄』の本来あったであろう姿を平易な形で紹介することにより、一層本書に対する理解が進み、日本書論書道史研究も深化するものと思われる。なお、本稿は、拙稿「校本『夜鶴庭訓抄』(一)」(『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第六〇巻 二〇一一)・「校本『夜鶴庭訓抄』(二)」(『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第六一卷 二〇一二)で行った校訂作業を基盤とする。

校訂作業で取り扱った写本は、全十四種類であるが、これらの詳細については、前述の拙稿を参照されたい。ここでは、写本を系統立てて列挙するにとどめる。十四種類の写本を中世の初期写本と近世の流布本とに区別した上で、中世の初期写本は世尊寺家七代目・伊経系統本と八代目・行能系統本の二系統に、近世の流布本は『群書類従』系統本と『続群書類従』系統本の二系統に分類した。今回、訳注で取り上げた写本のみ、その略称を「」で示した。

群馬大学教育学部国語教育講座 永由徳夫

『夜鶴庭訓抄』写本一覧

【中世の初期写本】

〈伊経系統本〉

1. 「青蓮」 京都・青蓮院蔵本

〈行能系統本〉

2. 「宮書」 宮内庁書陵部蔵本

3. 「東北」 東北大学附属図書館狩野文庫蔵本

4. 「天理」 天理大学附属図書館蔵本

5. 「金沢」 神奈川県立金沢文庫保管・称名寺蔵本

6. 金沢市立図書館蔵本

【近世の流布本】

〈『群書類従』系統本〉

7. 「京大」 京都大学附属図書館蔵本

8. 「群書」 『群書類従』(巻四九四) 所収本

9. 国立国会図書館古典籍資料室蔵本

10. 早稲田大学図書館特別資料室蔵本

11. 無窮会専門図書館神習文庫蔵本

〈『統群書類従』系統本〉

12. 「東大」 東京大学史料編纂所蔵本
13. 国立公文書館内閣文庫蔵本
14. 「統群」『統群書類従』（巻九一五）所収本

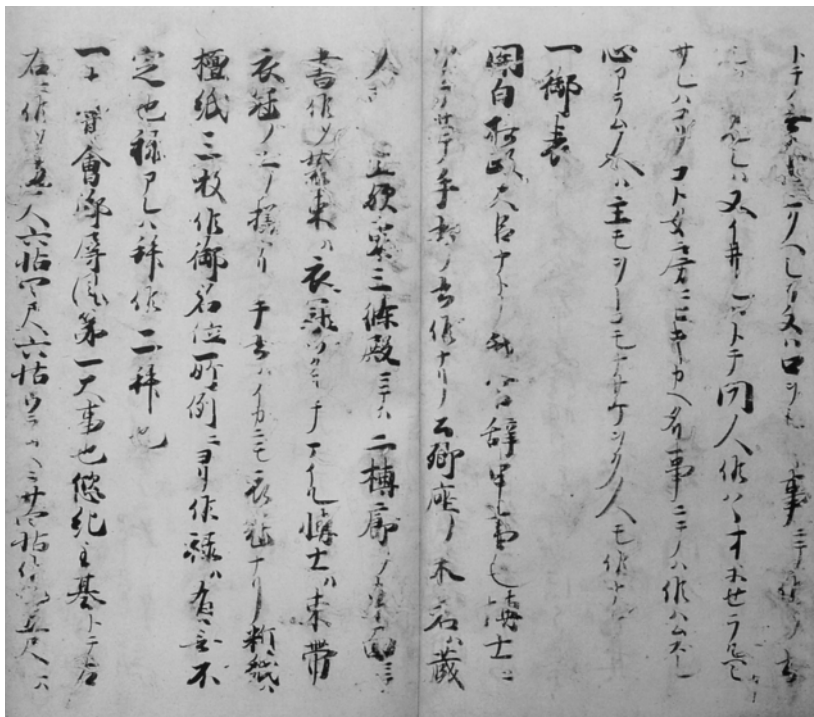
以上の四系統を比較検討すると、中世の初期写本と近世の流布本とは、表記や記述内容において、かなりの差異があるが、この点については拙稿を参照されたい。¹⁾『夜鶴庭訓抄』の訳注には、加藤達 解義『夜鶴庭訓抄』〈書論双書 7〉（日本習字普及協会 一九八二）、『精萃図説書法論』〈9 日本〉所収 杉田宗雨訳「夜鶴庭訓抄」（西東書房 一九九一）の二書があるのみである。しかも、この二書はいずれも近世の流布本である『群書類従』所収の『夜鶴庭訓抄』を訳出したものである。江戸時代以降、『夜鶴庭訓抄』がどのように読まれたかを知る上では有益であるが、これをもって中古・中世の書芸術観を論ずるならば、必ずや時代的齟齬を生ずるに違いない。

そこで本稿では、中世最古の写本と考えられる〈伊経系統本〉の青蓮院蔵本を底本とし、これに続く〈行能系統本〉の宮内庁書陵部蔵本、東北大学附属図書館狩野文庫蔵本、天理大学附属天理図書館蔵本等を援用しながら訳出するという、従前には見られぬ新しい角度から、本来あつたであろうはずの『夜鶴庭訓抄』の姿を明らかにしていきたいと思う。故に本稿タイトルに「新釈」の語を冠した次第である。なお、今回は紙幅の都合により、『夜鶴庭訓抄』全二十四条のうち、冒頭より第十条までを訳出することとする。

二、『夜鶴庭訓抄』訳注

【凡 例】

一 「本文」は藤原伊行の原本に遡源することを専一に考え、現存最古



京都・青蓮院蔵本

の写本である青蓮院蔵本を底本とし、他本によって校合した結果、設定したものである。なお、通し番号の算用数字は、底本の区切りに基づき、校者が便宜上、冠したものである。「本文」の改行は底本に準じた。

二 「本文」の記載は、底本とした青蓮院蔵本を始めとする初期写本がいずれも漢字片仮名交じり文であるため、それに従った。但し、片仮名のままではわかりにくい語については、漢字に改めた。また、適宜、送り仮名、句読点を施し、必要に応じて濁点を付した。写本に記される見せ消ちは、傍点で示した。

三 漢文体の語句は訓読し、「不」「也」等の助動詞は片仮名で表した。初期写本の引用に際し、校者が「セ」と翻刻するのは、実際には「せ」と書されていることを付言しておく。

四 《口語訳》《語釈》は簡明であることを心がけた。詳密な校異については、拙稿を参照されたいが、中世の初期写本と近世の流布本の差異を明らかにするため、特に重要な語句については、《語釈》中で取り上げた。また、多く説明を要する語句については、《補説》の項を設けて解説した。

1

入木^{*1}、手ヲ書ク事ヲ申ス。此ノ道ヲコソハ、何事ヨリ
モ伝ヘサセ給フベケレ。額^{*3}、御願扉^{*4}、異国返牒^{*5}、御表^{*6}、
色紙形^{*7}、願文ナド、人申スマジ。某ガ子トテ院内ヨ

リ書ケト仰セラルマジ。サレド仮名ハ書カセ給フベキナリ。世ニ手書^{*10}
ニ

ツカハレサセ給ハム定、御草子ウケタマハリテ書カセタマハン
ズル。仮名^{*12}ハサハ申セドモ、道セバク、ヤスキ事ナレバ、書カセ給
フホドハ、

ナドカコノマセ給ハザラン。草子書ク様、少々申シ候ベシ。

《口語訳》

入木とは、書道のことを言います。この書の道こそ、他の何事にもまして伝えていくべきものです。額、御願の扉、異国への返書、御表、色紙形、願文などは重要であるので、人から揮毫を依頼されることもないでしょう。私の子だからといって、御所より書くようにとの仰せごともただけないでしょう。しかしながら、仮名は書かせなざるはずです。世の中に能書としてお仕えしている立場です。御草子をお願いしてお書きになることもありません。仮名はそうは申しても、その道は狭く、容易でありますから、お書きになる時は、どうしてお好みにならぬことがあります。草子の書き方について、少々お話しします。

《語釈》

*1 入木…《補説》参照。

*2 手ヲ書ク事…文字を上手に書くこと。「手」とは、文字、筆跡、書の意。「青蓮」「手ヲ書事」「宮書」「手書事」「天理」「手書ノ事」

「東大」「手書ノ事」(朱書加筆) 「京大」「群書」「手かく事」

*3 額…木版に揮毫し、殿舎に掲げたもの。内裏の諸額は当代随一の能書が選任され、揮毫の栄に浴した。

*4 御願扉…天皇や皇族・貴族の立願によって建立された所謂御願寺の扉に揮毫したもの。遺例に源兼行筆「平等院鳳凰堂色紙形」

*5 異国返牒…異国への返書。「青蓮」「異向返牒」他本いずれも「異国返牒」

*6 御表…上表文。臣下が天皇に差し出す文書。4 *1 参照。

*7 色紙形…扉・屏風・障子などの彩色された方形の区画をいう。

当初は、この区画に直接、和歌や漢詩を書した。遺例に小野道風筆「屏風土代」

*8 願文：神仏に祈願する文書。遺例に伝橘逸勢筆「伊都内親王願文」

*9 院内：院の御所。「青蓮」のみ「院内」。他本すべて「内院」とするも不適。

*10 手書：手書き（てかき、てがき）。文字を上手に書く人。能書。

*11 御草子：仮名で書かれた書物。物語・日記・歌集など。また、これらを書写するための料紙。「青蓮」「御草子」

「宮書」「御造帋」「天理」「御雙帋」「東大」「御造紙」

「京大」「群書」「御さうし」

*12 仮名：「青蓮」「カレ」とするも、他本により訂正す。

「宮書」「カナ」「天理」「假名」「東大」「かな」

「京大」「假名」

《補説》

「入木」の語は、王羲之が木版に書した文字を工人が削ったところ、墨が三分の深さまで染み込んだという「入木三分」の故事に基づく。中国では、書法における筆力が沈着勁健なさまをいう。日本では、手習い、書道の意として用いられ、「入木道」の語も生まれた。「入木」の語は、『夜鶴庭訓抄』以前には、『本朝文粹』『台記』等に見える。後続書論である『才葉抄』『入木抄』では、書道の異称として「入木道」が用いられる。但し、持明院流当主が自流関連の書名に『入木道秘伝』『入木道相伝事』のように「入木道」を冠したために、江戸時代に入ると、書道の単なる異称ではなく、「秘伝としての書式故実を重んじる流儀書道」という限定した意味合いに変容していった。

2

一 御草子^{*1}ハ引キ開キテ、端ヨリ^{*2}当家ニハ書キ給フベシ。普通ニハ中ヨリ始ムルナリ。カクハ申セド、我モ多ク中ヨリ書キテ候。ソレハ主ノ好ミニテモ候。思ヒ忘ルルヨリモ候。次々ノ人ノハトモカクモ、イカニ書キタルモ候。サレド、サル事ハ知りテノ事ナリ。」

又、手ノ様タヲ一帖ノウチニ見セテ書クベシ。様タト云フハ、イロハガキ、又、草^{*5}、又、ミダレガキ^{*6}、タトヘバ様ヲカヘテ書クナリ。ソ」

レモ草子^{*7}合ハセナド云フ事ノアルニ、無下ニ無念ニ同様ニ

書キタルモワロケレバ、カタツマアリテ候ナリ。然ラズンバ無ナル

故ナリ。君ノ御草子^{*12}一部トアル物ハ、サハ候マジ。ウルハシク

候ベシ。草子ト申セド、物語ヲバ手書ノ書カヌコトニテ候。

書キテトヤ人候ハバ、書クトハイハデ、トカクスベリテナ書カセ給ヒソ。」

《口語訳》

一 御草子は引き広げ、その端より当家（世尊寺家）ではお書きなさい。通常は、中から書き始めます。とは申せ、私も多くの場合、中より書き始めることがあります。それは依頼主の好みによることもあります。というっかり忘れてしまう折もあります。次々にある依頼主のものについては、どのように書いても差し支えないでしょう。しかしながら、本来あるべき事柄については、十分に心得ておくことです。

また、筆跡の様々な変化を一帖の中に展開させて書きなさい。様々な変化というのは、いろは書き、また、草仮名、また、散らし書き、といったように趣を変えて書くことです。それも草子合わせなどがある時には、ひどく残念に思われるような一様な書き方は、興ざめ

で美しいので、当家のしきたりどおり端から書き始めます。そうでない、見劣りすることになるからです。但し、主君からの御草子一部とあるものは、そのようには書きません。きちんと端正にお書きなさい。草子と申しまでも、物語は能書は書かないものです。書いてほしいと依頼する人があっても、書くとは言わず、あれやこれやと辞退してお書きにならないことです。

《語釈》

*1 御草子…1*11 参照。

*2 当主…世尊寺家。藤原行成を祖とする能書の家系。〔青蓮〕

〔當家〕〔宮書〕〔天理〕〔此家〕〔東大〕〔この家〕〔京大〕〔群書〕〔家のならひ〕

*3 思ヒ忘ルル…うっかりして失念する。〔青蓮〕〔思ワスル、〕

〔宮書〕〔思ヒワスル、〕〔天理〕〔思忘ル、〕〔東大〕〔思わする、〕〔あやまちて〕を消して〔思〕と朱書 〔京大〕〔群書〕〔思ひあやまりても〕

*4 イロハガキ…「いろは歌」を仮名書きにしたもの。〔青蓮〕

〔宮書〕〔イロハガキ〕〔天理〕〔以呂波ガキ〕〔東大〕〔京大〕〔群書〕〔いろはがき〕

*5 草…草仮名。万葉仮名をくずしてできた仮名文字。〔青蓮〕

〔サウ〕〔宮書〕〔東北〕〔東大〕〔草〕〔天理〕〔サウ〕〔協に〕〔草〕と青筆で書す 〔京大〕〔群書〕〔さう〕

*6 ミダレガキ…散らし書き。行頭や行間をそろえずに、変化をつけて書くこと。

*7 草子合ハセ…平安時代の物合わせの一。草子の絵・文字・文章・詩歌・装丁などの優劣を競う遊び。〔青蓮〕〔草子合〕

〔宮書〕〔造紙アハセ〕〔東北〕〔造帋アハセ〕〔天理〕〔草子アハセ〕〔東大〕〔京大〕〔群書〕〔さうしあはせ〕

3

*8 無下…ひどく劣っている。

*9 無念…残念である。

*10 カタツマ…片端。片方のはし。〔天理〕〔行妻〕〔協に〕〔カタツマ〕と青筆で書す

*11 然ラズンバ…〔青蓮〕〔不然者〕。この一文は〔青蓮〕のみに見える。

*12 御草子…〔青蓮〕〔御草子〕〔宮書〕〔御雙帋〕〔東北〕〔天理〕〔御雙紙〕〔東大〕〔京大〕〔群書〕〔御造紙〕

一 歌書ク様。二行二書カセ給ハバ、五七五行、七七一行二候ベシ。三行有ルベキハ、五七一行、五七一行、七一行二候ベシ。トテモカクテモ

歌ダニ書キ付ケテウツクシウナド申スハ、ムゲノ事ニ候。サレバコソ、家ハイミジキ事ニテ候へ。君モツカハセ給へ、世ノ人ニモマサル所ハ候へ。ソレニトリテ、三代集ヲ書クニ口伝候。三代ノ御門ノ我モ我モト選バレタルヲ申スナリ。古今・後撰・拾遺ナリ。三ノ物ヲ取り合ハセテ、三代集トハ申スナリ。

ソレガ題不知・読人不知ナド申スニ、サマザマニカヘラレタルナリ。古今ニハ題不知・読人不知、後撰ニハ題不知・読人モ、拾遺ニハ題・読人不知ト候ベシ。我が先祖 大納言殿

行成、帥殿伊房、三代集書カセ給ヒタルニ、オホク躬恒ヲ三常ト書キ給ヒタリ。又、法師トアル所ヲほうしト書カレタリ。様々ノアルナメリ。サ様ニモ書カセ給フベシ。其ノ人ノ子孫ナドハ、ソレヲ習ヒ候ゾ。人難ジ問フ人アラバ此ヲ得意ニテ仰セラレ候ベシ。

又、草子ハナチテハ人申スマジケレドモ、サリナン人ノ子

トテ、無下ニユクヘシラヌハ、口惜シキ事ニテ候ゾ。書
シヲ見シハ、父イヒシハトテ、問フ人候ハバ、仰セラルベシ。
サレバコソ、コト女房ニヒキカヘタル事ニテハ候ハムズレ。
心アラム人ハ、主モヲトコモナサケラク人モ候ナン。^{*4}

《口語訳》

一 和歌を書く様式。二行にお書きになるならば、五七五を一行、七七を一行に書きなさい。三行にしたければ、五七を一行、五七を一行、七を一行に分かちて書きなさい。いずれにしても、歌だけ書き付けて美しいなどと申すのは、論外のことです。だからこそ、当家のしきたりは、大変すぐれているのであります。主君にお仕えになれば、世間の人よりもすぐれている所がおわかりになります。それに関して言えば、「三代集」を書くのに口伝があります。「三代集」は時の帝が我も我もと勅撰した歌集のことを言います。「古今集」「後撰集」「拾遺集」を指します。この三つの歌集をあわせて「三代集」と言います。その「題不知 読人不知」などと申すものを、歌集ごとにさまざまに書き替えています。「古今集」では「題不知 読人不知」、『後撰集』では「題不知 読人モ」、『拾遺集』では「題 読人不知」と区別して書きます。我が先祖の大納言殿・行成卿、帥殿・伊房卿は、「三代集」をお書きになる時、多くの場合、「躬恒」を「三常」とお書きになりました。また、「法師」とある所は「ほうし」と書かれました。様々なしきたりがあるようです。ですから、それに則ってお書きなさい。世尊寺家の子孫は、そのしきたりを習得することです。もし、難詰する人があったとしても、当家の流儀に拠るものですとお答えなさい。

また、草子については別に人は何も言わないだろうけれど、能書の家の子として、まったく当てがないというのも、残念なことです。もし書いたものを見られたら、父の教えですと、問う人がいました

なら、そうお答えなさい。果たして、すぐれた女房におなりになることでしょうか。教養のある人は、主君も男性も情愛の深い人に恵まれるでしょう。

《語釈》

*1 ムゲノ事…「青蓮」「ケフノ事」とあるも、他本により訂す。

「宮書」「ムゲノ事」「東北」「ム下ノ事」「天理」「無下ノ事」「東大」「無下ノ事」「ノ事」は朱筆で追記

「京大」「群書」「むげの事」

*2 ほうし…「青蓮」「東大」「ほうし」「宮書」「法シ」「天理」「法シ」「法シ」の「し」に青丸を付け、青筆で「シ」と傍書 「京大」「群書」「法シ」

*3 草子…「青蓮」「草子」「宮書」「造帋」「天理」「草子」の脇に青筆で「造紙」「東大」「さうし」「京大」「群書」「造紙」

*4 ナサケラク人…情愛の深い人。「青蓮」「ナサケラク人」「宮書」「ナサケ多人」「天理」「ラク」に青丸を付け、「多」と傍書

4

一 御表^{*1}

関白、摂政、大臣ナドノ我が官辞シ申ス事ナリ。博士ニツクラセテ、手書ノ書キ候ナリ。公卿座ノ末、モシハ蔵人所ノ上カ、東三条殿ニテハ、二棟ノ廊ノ東^{*3}面ニテ^{*4}書キ候ゾ。装束ハ衣冠ツクリテマイル。博士ハ束帯、衣冠ノ二ノ様ナリ。手書ハイカニモ衣冠ナリ。料紙ハ檀紙三枚ニ候、御名位所例ニヨリ候。禄ハ有無^{*7}定マラザルナリ。禄アレバ拝シ候。二拝なり。

《口語訳》

一 御表

関白、摂政、大臣などが官を辞す際の上奏文のことです。文章博士に文を作成させ、能書が清書します。公卿の末座、もしくは蔵人所の上座、東三条殿では、二棟の廊の東向きの部屋で書きます。装束は衣冠を調べて参内します。博士は束帯、もしくは衣冠の二通りがあります。能書はどのような場合も衣冠です。料紙は檀紙三枚、御名、官位は書式に則って書きます。俸禄の有無については、決まっています。褒美を賜れば、拝して頂戴します。二拝します。

《語釈》

- *1 御表：慶事の祝辞、官職の拝辞等を記して、臣下から天皇に奏上する文書。
- *2 博士：ここでは文章博士をいう。大学寮に属し、史伝・漢詩文等を教授した。
- *3 東三条殿：藤原頼通が後朱雀天皇の御所として建設した。その後、藤原家の邸宅として、仁安元年（一一六六）に焼失するまで、一二〇年以上にわたり、摂関家に関わる主要な儀式の大半がここで執り行われた。
- *4 二棟ノ廊：東三条殿の東、対につらなる東方の一画に位置する。「青蓮」「二樽」「宮書」「京大」等、他本により訂す。
- *5 衣冠：貴人の参内用の略式礼服。束帯の略装。
- *6 束帯：朝廷の儀式・公事に際し、着用した正式な礼装。
- *7 檀紙：楮を原料として漉かれた最上質の和紙。天平年間の頃、檀（まゆみ）の樹皮を原料としたことから、この呼称がある。「まゆみのかみ」とも。
- *8 位所：位署。官位、姓名を公文書に記すこと。また、その書

式。位署書き。「青蓮」「御名位所」「宮書」「御名注

鹿」「京大」「群書」「御名注」「東大」「御なところ」

を消し、「御名注疏」とす。

- *9 禄：祝儀。褒美。「青蓮」「禄ハ有無不定也」「宮書」「禄有度候、無度候」「天理」「禄アルタビモ候、ナキタビモ候」「東大」「ろくあるたびもなきたびハ」「京大」「群書」「禄ある度あり」

5

- 一 大嘗会御屏風、第一大事ナリ。悠紀・主基トテ左
- 右ニ候ゾ。五尺六帖、四尺六帖、ウラウヘニ廿四帖候ナリ。五尺ニハ
- 本文ヲ書き、四尺ニハ仮名ヲ書き候。博士ノ二人シテ
- 本文エリ候。兼テ歌ニモ垂レル博士ハヤガテヨミ候。
- サラネバ別ノ人ヨミ候也。悠紀ノ方ノハ、タミカナニテ、
- 主基ノ方ハ、サウガナニ書き候ナリ。此カクスコトニ候。

《口語訳》

一 大嘗会の御屏風色紙形は、最も大事であります。悠紀屏風・主基屏風があり、左右に立てられます。それぞれ五尺六帖、四尺六帖の二種があり、左右あわせて二十四帖になります。五尺の唐絵本文屏風には漢文を書き、四尺の大和絵和歌屏風には仮名を書きます。博士二人が漢文の撰文をします。あわせて、和歌にも秀でる博士がそのまま歌も詠みます。兼任できない場合には、別の歌人が歌を詠みます。（四尺屏風の和歌について）悠紀屏風の方は、ただ仮名で、主基屏風の方は、草仮名で書きます。この書式は、人には知らせず大切に守ることです。

《語釈》

*1 大嘗会御屏風…《補説》参照。

*2 第一大事ナリ…「青蓮」「第一大事也」「天理」「第一大事也」「宮書」「第一也」「東大」「第一の事也」「(の)を」「大」に訂正」「京大」「群書」「大事也」

*3 悠紀・主基…大嘗会用の新穀を進上する東西の国のことであるが、ここでは大嘗会に際し、新調された悠紀主基屏風のことをいう。

*4 五尺六帖、四尺六帖…後冷泉帝へ一〇四五年即位以降、五尺の唐絵本文屏風、四尺の大和絵和歌屏風という形が整ったとされる。「四尺」について、「青蓮」「東大」「四尺」とするが、「宮書」「東北」「続群」は「六尺」と誤写す。「天理」は「四尺」と見せ消ちを施し、脇に「六」と小書きす。ウラウへ…裏表(うらうへ)。左右、前後、上下などの意で用いるが、ここでは左右をいう。「京大」「群書」「左右」

*5 カナ…平仮名。「平仮名」の意で取るのは、「青蓮」「京大」「群書」。「宮書」「天理」「東大」は「草仮名(草)」とする。

*6 「青蓮」「カナノイロハガキニテイ本」との注記あり。「宮書」「悠紀ノカタノ假名、草ガナニ書候」「天理」「悠紀ノカタノカナハサウニ書」と見せ消ちを付け、脇に「カナニ」と小書きす。「東大」「悠紀の(方ノカナハ)さ(う)にかき候」「(一)部挿入。「京大」「群書」「悠紀の方の哥をば、たゞかんなに」

*7 サウガナ…草仮名。「青蓮」のみ「サウガナ」とする。「天理」「東大」は、「以呂波書き」とし、「平仮名」の意で取る。「宮書」にはこの一文無し。「天理」「主基ノ方ノカナハ、以呂波書ニ書候。」「東大」「主基のか(たノカナハ以呂波)か(キニ)かき候。」「(一)部挿入。「京大」「群書」

「主基の方は、さうに書。」(「主基」は誤写)

*8 カクスコト…人目にふれないように大切にする。近世の流布本に見られるその家の奥義としての「秘説」とは、ニュアンスが異なる。「青蓮」「カクスコト」「宮書」「カクス事」「(天理)」「カクス」の脇に「秘」を当てる」「東大」「かくす事」「京大」「群書」「秘説」

《補説》

「大嘗会御屏風」とは、天皇即位後に行われる大嘗会の際に新調される悠紀主基屏風のことである。大嘗会のために新設された東側の斎場を悠紀、西側の斎場を主基といい、そこに詠えられた屏風が悠紀主基屏風である。この屏風の色紙形揮毫は、能書にとって最高の栄誉とされる。ちなみに、伊行は、二条天皇へ一一五九年即位と次の六条天皇へ一一六五年即位の二回にわたり、担当している。『夜鶴庭訓抄』第二十三条では、大嘗会悠紀主基屏風色紙形の揮毫者を列挙するが、これに拠れば、複数回の揮毫は、朱雀・村上二帝の小野道風、円融・花山・一条三帝の藤原佐理、三条・後一条二帝の藤原行成、後冷泉・後三条・白河三帝の源兼行の四名に止まる。後、所謂「三蹟」と総称される小野道風・藤原佐理・藤原行成、「平等院鳳凰堂色紙形」「高野切第二種」の筆者と考えられる源兼行といった当代一流の能書に比肩し得たことは、伊行にとって面目躍如たるものがあつたであろう。大嘗会悠紀主基屏風色紙形の揮毫について「第一大事ナリ」と述べ、その書式について「此カクスコトニ候」と申し伝えることに、これにかける伊行の並々ならぬ決意が窺える。その意思是、全二十四条中、この第五条が群を出でている。

6

一 額^{*1}ハアケクレ御覧ゼシ事ナレド、大内^{*2}ノ手書^{*3}ノ
大事^{*4}ナリ。サハ候ヘドモ、古本^{*5}ニテミナウツシテ書キ候ゾ。
此ニトリテ書キカヘルトコロモ候ゾ。西面^{*6}ニ三四バカリヨ。
西面^{*7}ニ三四バカリヨ。

《口語訳》

一 額は毎日御覧になれるものですが、とりわけ大内裏の額の揮毫は、能書にとつて重大な事柄です。とは申しまでも、古くからの伝本を見て、みな同じように書きます。それに関して、書体を書き替える箇所もあります。西面に三、四枚ほどでありましょうか。

《語釈》

- *1 額…1 *3 参照。
- *2 アケクレ…明け暮れ。朝夕。毎日。〔青蓮〕「アケクレ」〔宮書〕「朝暮」
- *3 大内…宮中。内裏。〔青蓮〕「大内」〔宮書〕「大内裏ノ額」〔東北〕「大裏」
- *4 大事…〔宮書〕「今生ノ大事」〔京大〕「群書」「第一大事」
- *5 古本…古本(こほん)。古代の書籍。古くからの伝本。〔宮書〕「古本ニテ皆写之書」〔京大〕「群書」「おほく古本を見て書」
- *6 此ニトリテ…〔青蓮〕「此□□□□」。他の古写本によつて補う。〔宮書〕「東北」〔天理〕「其ニトリテ」〔東大〕「それニトリテ」〔京大〕「群書」「額にとりて」
- *7 三四バカリヨ…〔青蓮〕「三□(計?)ヨ」〔宮書〕「三四バカリ」〔天理〕「三四バカリヨ」〔東大〕「三四ばかり」〔京大〕「群書」この一文無し。

7

一 イソグ物書キ候ニハ、筆^{*2}ノツカラ切り候ゾ。又イタク墨^{*3}ヲスラズ。

《口語訳》

一 急ぎのものを書くのには、筆の軸を切つて短くします。また、それほど濃くは墨を磨らないようにします。

《語釈》

- *1 イソグ物書キ候ニハ…〔青蓮〕「□□□物」。他本によつて補う。〔宮書〕「天理」〔イソグ物〕「金沢」〔イソギノ物〕「東大」「いそぎの物」↓「いそぐ物」〔京大〕「群書」「いそぐもの」
- *2 筆ノツカ…筆の柄(つか)。筆の軸。筆管。〔懷に設けたる柄短き筆など〕〔源氏・濡標〕
- *3 墨ヲスラズ…〔青蓮〕「スミヲスラズ」〔宮書〕「天理」〔墨ヲスラヌ也〕〔東大〕「すみすらぬなり」〔京大〕「群書」「すみすらず」

8

一 御願^{*1}ノ扉給ハリテ書キ候ニ、土代^{*2}ヲシテ書キ候ニトリテ、上ノ色紙^{*3}形^{*4}スコシ大キニ、下ヲバスコシ小サク書キ候ナリ。草ナル^{*5}枚ハ草ニ、真ナル^{*6}枚ハ真ニ書キ候。一枚ガ内ニ書キマゼタルハワロキ事ニテ候。我居タル^{*7}トコロノタカクモナキ所ニハサ候マジ。御願ニ取リテ大小此クノ如キニ候ベシ。諸^{*7}々ノ物ノ絵ハ、上ハ小サク下ハ大ニ候ニ、此ハ相違シテ候。」

其ノ故、尤モイハレテ候。能ク／＼心得サセ給へ。

《口語訳》

一 御願寺の扉の色紙形揮毫を賜りて書く場合は、下書きをしてから清書しますが、その際には、上の色紙形をわずかに大きめにし、下の色紙形をやや小ぶりに書きます。草書で書く色紙形は草書で、楷書で書く色紙形は楷書で書きます。一枚の中で、草書と楷書を書き混ぜるのは良くありません。ただし、日常の居住における身近な所では、そのようなことは気にしなくても良いでしょう。御願寺の扉に関しては、上下の色紙形の大小はこのようになります。もろもろの絵については、上の色紙形では小さく、下の色紙形では大きく描かれますが、これは色紙形の大きさに相違します。そのわけについては、なるほど言われがあるのでしょうか。十二分にご理解下さい。

《語釈》

- *1 御願ノ扉…1*4 参照。 諸本、「書キ候ニ」の後に、挿入あり。 「宮書」「絵ナル本文ヲ絵ニ見合テ」 「天理」「本文ヲ絵ニ見合セテ」 「金沢」「本文ヲ絵ニ合セテ」 「京大」「群書」「本文をゑにあはせて」
- *2 土代…下書き。 草稿。 小野道風筆「屏風土代」はその一例。
- *3 草…草書。「草」には草仮名の意もあるが、ここでは草書として後続の真書（楷書）と対比される。 「青蓮」「サウナルヒラハサウニ」 「宮書」「草ナルヒラハ草、」 「天理」「草ナルトビラハ草ニ」 「金沢」「サウナル扉ラハサウノ字ニ書、」 「京大」「群書」「さうなるひらはさうに」
- *4 枚…枚（ひら）。 紙など薄くて平らなもの。 「青蓮」「宮書」「ヒラ」 「京大」「群書」「ひら」
- *5 真…真書。 楷書。 「青蓮」「シムナルヒラハシムニ書候」 「宮

書」「真ナルヒラハ真ニ候ベシ」 「天理」「真ナルトビラハシムニ候ベシ」 「金沢」「真ナル方ヲバ真ニ書也」 「京大」「群書」「真なるひらは真に」

「表の方には楽府をうるはしく真に書き、裏には御筆とどめて草にめでたく書きて」へ大鏡・伊尹

- *6 我居タル…「青蓮」「我キタルトコロノタ□□ノ所ニハサ候マジ」 「天理」「我サタル屋ナドノタカクモナキ所ノ障子ハ、色紙形ヲバ、上下ニヨリテ、大少候ベシ」 ↓「宮書」「天理」「我キタルカラカミノ障子ナドハ上下大小（少）候マジ」 「金沢」「タゞノ居所ナンドノハ上下大小不定也」「京大」「群書」「但、居屋などのけちかき障子の色紙形は、上下によりて大小あるまじ」
- *7 諸タノ物ノ絵…「青蓮」「諸ノ物繪」 「宮書」「ヨロツ物ノ繪」 「天理」「万ノ物ノ繪」 「金沢」「ヨロツノ物ノ繪」 「京大」「群書」「ゑなど」

9

一 硯。第一ハ唐硯ナリ。硯ノヨキト申スハ、スレバ硯モ墨モ、トモニツブル様ニ覚エ候ゾ。其ノ上ニスリタル水ノ遅ク干ヌナリ。又泡フカズ、トロメカズ、ナメラヌヨシ。夏ノ硯ハトクキタナクナル。宵ノ水ワロシ。^{*4}

《口語訳》

一 硯。第一は唐硯です。良い硯と申しますものは、磨れば硯も墨も、ともに磨耗していくように感じるものです。その上に磨った墨は、乾きにくいのです。また、泡ができず、とろとろにならず、つるすべらないのが良いのです。夏の硯は、乾いてすぐに汚れます。宵越しの墨は良くありません。

《語釈》

- *1 唐硯：中国伝来の硯。中国の硯は、隋・唐まで陶土を素材にした陶硯が主流であった。日本でも奈良・平安時代は一般に陶硯が用いられた。
- *2 硯モ墨モ：「青蓮」「硯モ墨モ」「宮書」「天理」「墨モ硯モ」「金沢」「墨モ」「京大」「群書」「墨も硯も」
- *3 夏ノ硯ハ：「宮書」「天理」「京大」「群書」等、諸本はこの一文以下を別に条立てするが、ここでは底本に従う。
- *4 宵ノ水：宵越しの墨。宿墨。

10

一 墨ハ第一唐墨ナリ。ワロキアリ。ヨキハ第一ト為スナリ。
 唐墨ノヨキハ、朽チズ遅クツブ。キラアリ。藤代ハカタウ
 イカニヨケレドモワロク候。何事モ昔ニハカハリテ、ウルハシクモ
 候ハズ。ハシバカリヨクテ、中ワロク候。又、墨ヨケレドモ、料紙
 ノ墨ツキワロク、キラメカヌ紙候。コ紙ト申ス物ナリ。檀
 紙ナリ。唐紙ノ中ニ墨ツカヌ物候。墨ノトガニハアラズ。

《口語訳》

一 墨の第一は唐墨です。といっても、中には良くないものもあります。良い唐墨が第一であります。唐墨の良いものは、腐らず、磨耗がゆっくりとしています。そして美しい輝きがあります。藤代墨は固く、どんなに良いものであっても、それほどたいしたことはありません。何事も昔とは変わり、美しい墨色にはならないのです。墨の端ばかりが良くて、中は良くありません。また、いくら墨が良くて、料紙の墨付きが良くなく、墨の輝かない紙があります。この紙といわれるものです。檀紙がそうです。唐紙の中にも墨付きの良い紙があります。これらは、墨のせいではありません。

《語釈》

- *1 キラ：綺麗。美しく輝くさま。
- *2 藤代：藤代墨（ふじしろずみ）。紀伊国・藤代で作られた上等とされる松煙墨。「青蓮」「東北」「藤代」「宮書」「フダシロ」「天理」「藤代ノ墨」「京大」「群書」この一文以降「中ワロク候」まで無し。
- *3 コ紙：こかみ。鳥の子紙の略か。鳥の子紙は厚紙ともいい、雁皮を主原料として漉いた最上級の厚手の料紙。「青蓮」「コ紙」「宮書」「東北」「コカミ」「京大」「唐紙」「群書」「厚紙」
- *4 唐紙：中国製の紙（からのかみ）の意で、とくに平安時代に舶載された北宋製の料紙をいう。胡粉や雲母を用いて文様を施した装飾紙。後にはこれに倣い、日本でも生産され、人々におおいに好まれた。

考察に代えて

本稿では、『夜鶴庭訓抄』全二十四条のうち、第一条から第十条について、最古の写本と考えられる青蓮院蔵本を底本に、判読不明な箇所は他の古写本を援用して口語訳を試みた。中世の初期写本を基盤に訳出したのは、本稿が初めてであるが、『群書類従』所収本を底本とした前掲の加藤達氏、杉田宗雨氏の訳とはだいぶ異なる点がある。青蓮院本と群書類従本との内容の相違について、いくつか記しておきたい。

・第五条「大嘗会御屏風」

青蓮院本では、大嘗会悠紀主基屏風の色紙形揮毫を「第一大事也」とする。一方、近世の流布本である群書類従本では「大事也」とするのみである。悠紀主基屏風の数について、杉田氏は、悠紀殿に五尺屏風が六点、主基殿に四尺屏風が六点と解釈する。だが、青蓮院本には、

悠紀主基屏風それぞれに、五尺屏風六帖、四尺屏風六帖の二種があり、左右あわせて二十四帖、と記される。また、群書類従本では、この第五条が「秘説」の語の初出となるが、青蓮院本は、ここを「カクスコト」とする。「カクスコト」の謂いには、人目にふれぬよう大切にし、重要事として忘れないように、というニュアンスが色濃いが、「秘説」になると「世尊寺家の奥義」としての意味合いが強調されていく。⁽⁴⁾

・第六条「額」

本条は第五条とは逆に、大内裏の額の揮毫について、青蓮院本は能書にとつて「大事也」とするのに対し、群書類従本では「第一大事也」とする。ここには、『夜鶴庭訓抄』というテキストの普遍化、一般化により、「悠紀主基屏風色紙形」と「内裏額」に対する人々の重み付けの意識の変化が読み取れるように思う。

・第八条「御願ノ扉」

御願寺の扉の色紙形の揮毫について述べるが、群書類従本は、その書式について「そのゆへあるべし」という一文によつて本条を終止する。一方、青蓮院本は、伊行の息女に対する「能くく心得サセ給へ」という慈愛に満ちた言葉で締め括られる。ここにもテキストが一般化する以前の、私の家の書としての『夜鶴庭訓抄』の姿を垣間見ることができよう。

・第十条「唐墨」

青蓮院本では、墨がどんなに良くても紙との相性が良くない場合があり、「墨ノトガニハアラス」と述べて、本条は終わる。一方、群書類従本は、先に「墨よけれども、きらめかぬ料紙有」と述べながら、「されど、それもよきすみにて書たるが、墨つきはよくみゆる也」とまとめる。ただ、この二文は齟齬をきたしており、後者は衍文と考えるのが妥当ではなからうか。

その一方で、群書類従本には和墨「藤代墨」に関する記述が見えない。あるいは「唐墨」の見出しに合わぬことから、整理されていた

可能性も考えられる。「藤代墨」については、天理大学附属天理図書館本に識語があり、中世の初期写本の中でも最も詳しい。これは、『古今著聞集』に見える話であるが、識語では、『十二条聞書』に云うとして、「後白河法皇が熊野詣の際に藤代の宿に到着したところ、松煙墨が献上された。この墨がいかほどかと試みに磨らせてみると素晴らしい発墨で、真に優品であると感嘆したという。」といった内容が、写本上部に書き込まれている。この後白河法皇が感嘆したという「藤代墨」に対して、伊行は「ウルハシクモ候ハズ」とあまり高く評価していない。あるいは世尊寺流を冷遇し、新興の法性寺流を重用した後白河法皇への対抗意識がそうさせたかと考えるのは、いささか深読みが過ぎるであらうか。だが、世尊寺家の当主として、家の書を今一度盛り立てたいと念願する伊行の立場を慮れば、あながち的外れとも言えないように思う。

その他、青蓮院本と群書類従本との「ほうし」と「法し」（第三条、「御名位所」と「御名注」（第四条）といった語彙の相違については、一々ここでは挙げないが、青蓮院本に基づくことで、群書類従本に拠る通釈を修正しなければならない点も散見される。今後引き続き『夜鶴庭訓抄』の定本の完成をめざして、一步一步研究を進めていく所存である。

〔注〕

- (1) 拙稿「『夜鶴庭訓抄』の研究―本邦濫觴期書論への照射―」（『青山杉雨記念賞 第三回 学術奨励論文選』二〇〇〇）
- (2) 拙稿「藤原伊行『夜鶴庭訓抄』の有り様」（『書論』第三十三号 二〇〇三）、「校本『夜鶴庭訓抄』（二）」（『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第六〇巻 二〇一一）、「校本『夜鶴庭訓抄』（二）」（『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第六一卷 二〇一二）
- (3) 加藤達解義『夜鶴庭訓抄』（『書論双書 7』（日本習字普及協会 一九八二）、

『精萃図説書法論』へ9 日本 所収 杉田宗雨訳「夜鶴庭訓抄」(西東書房 一九九一)

(4) 拙稿「へ秘伝」の視点から俯瞰した日中書論」(『書学書道史研究』第二二号 二〇一二)において詳述した。

〈付記〉

図版掲載に際しては、京都・青蓮院より御高配頂いた。茲に記して、深甚なる謝意を表する。なお、本研究は、科研費基盤研究(C)(23520152)の助成を受けたものである。